

## 「税金が果たす国際的な役割」

福岡市立博多中学校

福中 結那

「税金」というと、私は今までなんとなくマイナスなイメージをもっていた。しかし、今回この作文を書くにあたり、調べていくなかで、そんなマイナスなイメージはプラスに変わった。

国の歳出額の内訳のうち、〇.五％、およそ五千百二十三億円分は、「経済協力費」というものだ。これは、開発途上国の経済的、社会的開発や福祉の向上を目的とし、技術協力や資金提供を行う、政府開発援助という活動で使われている。世界には今もなお、紛争が絶えず、貧困や飢餓で苦しんでいる国が多く存在している。日本はそのような国に対して、インフラ支援や整備、次世代の担い手となる人材の育成、平和構築などへの支援を積極的に行っている。このような活動は、開発途上国やその国に暮らす人々を助けるだけでなく、世界での日本の地位向上や、輸入物資供給の安定、国際協力の推進など、世界各国との結びつきを強める点においても、非常に重要な活動だ。しかしなかには、日本国民が納めている税金なのだから、自国の発展のために使うべき、という意見もあるだろう。確かに、日本の財政は決して良いとはいえない現状にある。歳入の不足分を補うための公債金、その残高は年々増加しており、このままでは将来の世代に大きな影響を及ぼしかねない。そのような状況のなかで、なぜ日本は多額の税金を他国の発展のために使っているのだろうか。第二次世界大戦後の日本を思い出してみたい。戦後、日本は苦しい状況にあるなかで、他の国々からの支援を受けながら復興を果たし、今では主要先進国になるほどの発展を遂げた。そのような経験があるからこそ、戦後の日本と同じような現況にある国を支援することは、いわば日本の責務ではないだろうか。また、私達が食べているものや石油などの資源は、この発展途上国から多く輸入されている。今、私達が平和で豊かな生活を送ることができているのは、この国々のおかげでもある。そして東日本大震災などの災害時、いち早く日本を支援してくれたのは他ならぬ、この発展途上国の国々だ。バングラデシュでは、一日の収入二百円程度のなかから、一日百円ずつを寄付してくれていたそうだ。収入の半分を毎日、しかも遠く離れた日本のために。その重さを痛感すると同時に感謝の気持ちでいっぱいになる。そのようなことを考えると、日本の税金は日本のためだけに使うというのは、少し自己中心的な考えなのかもしれない。

私はまだ中学生で納めている税金は消費税くらいだ。けれど、その少しのお金が国境を越えて、世界のどこかで誰か一人でも助けることができたとしたら、経済協力費という税金の使い道は素晴らしいと思う。この作文を通して学んだ税金が世界に果たしている役割の重要性を忘れず、私もしっかりと税金を納めることができる大人になりたい。